ブラキムラとめぐる！仙台城下町ボヤージュ
【2023年8月1日放送分・中島丁／角五郎丁】

毎月第1火曜日に放送しています。歴史家で街歩きの達人・ブラキムラこと木村浩二さんと、旧城下町に88本ある石柱＝辻標から歴史の痕跡を探る旅です。街歩きのお供には、仙台市役所1階の市政情報センターなどで販売中の冊子、その名もズバリ「辻標」が便利です。88本ある辻標の場所や周辺の歴史が、写真とともに分かりやすく解説されています。

- 前回、広瀬川への吐水口を確認した、城下の難所「へくり沢」。その少し上流、広瀬川にかかる澱橋のたもとからスタートです。現在の橋の少し上流に、旧いレンガ造りの橋の基壇が残っています。これは、昭和30年代半ばまで使われていた「旧澱橋」の痕跡。粗末な木製だったと思われる江戸時代の橋は、明治25年に川内の第二師団に行くため鉄製のトラス橋に架け替わりました。河川敷に残る基壇は、明治25年～昭和36年の橋の名残なのです。

■ さて、今月の辻標はコーナー38本目「中島丁／角五郎丁」です。中島丁は、尚絅学院と宮城一高の間にある東西の通り。東には前回歩いたへくり沢の深い谷、南には広瀬川。そして西側も低くなっている地形です。そのあいだに広がる中島丁は、中央が盛り上がり、島のように高くなっていたのが地名の由来といわれています。位の高い侍達の、広大な武家屋敷が並んでいました。

■ 辻標のもう片面、角五郎丁はとてもユニークな名前ですが、これは「角五郎」という名の渡し守がこの場所にいたという言い伝えから。ここには、上流から流木などを流して集積する「木流し蔵」という藩の施設が置かれていました。今でいう燃料備蓄ステーションといったところでしょうか？流れが緩やかになる“澱み”を、江戸時代の人々は上手に利用していたのです。前回～今回と、シリーズのテーマである「四ッ谷用水」からは少し離れてしまっていますが、水の流れを上手に使って街づくりを行なった、先人達の知恵が感じられる歴史散歩なのでした。

〈文・佐々木淳吾〉